

A black and white illustration of three anime-style girls in school uniforms. The girl on the left has long dark hair with a large white bow and is looking thoughtfully to the side. The girl in the middle has dark hair in pigtails and a surprised expression. The girl on the right has long light-colored hair and is looking towards the viewer. They are all wearing similar school uniforms with dark collars and bows.

僕のモテ期は
ただの勘違いだった
のかもしれない

小説 狩野景

挿絵 野村輝弥

立ち読み版

第一章 幼なじみと転校生

第二章 キスしたことある？

第三章 迎えに来たけど

第四章 生徒会室にいらつしやい

第五章 恋人？ 幼なじみ!!

第六章 体育倉庫で告白レッスン

第七章 誰が恋人？

第八章 俺のモテ期……？

006

031

045

068

101

140

176

209

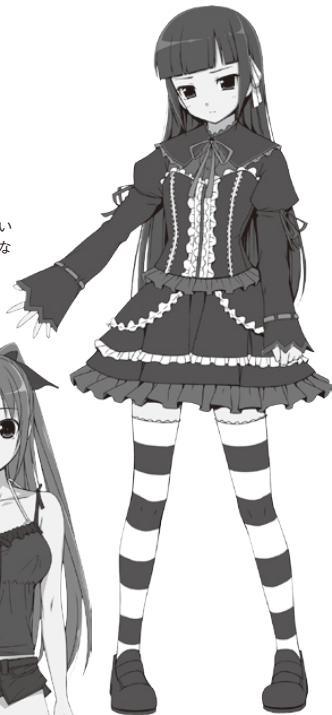
登場人物紹介

Characters



おとなし
音無 きくり

無表情かつ無口で何を考えているのか分からないが、なんとなくいつも蓮司という幼なじみ。



きりはや えみる
桐早 絵美瑠

親の転勤で転校して来た少女。
感情豊かで人懐っこい。



さかさづき ゆい
逆月 唯

蓮司の幼なじみ。気が強く素直ではないが、面倒見はよい。

くらはし れんじ
倉橋 蓮司

少し積極性に欠ける、
穏やかな性格の少年。

「んあはああん！」

胸の奥に渦巻いていた疼きが脈打ちを強めて、乳房全体を駆け巡った。いつの間にか硬く強張っていた乳首でこそばゆい火花が続けざまに弾ける。

自分で触れてしまったときのくすぐったさを濃厚にした甘い快感に腰がくねり、自分でも意図せず悩ましい喘ぎが溢れかえった。その艶美な反応に、股ぐらを圧迫している硬い感触が圧迫を増し、股間の割れ目へめり込みかける。

「おわああつ、違うんだッ、これはっ!!」

ジンと強い疼きがその割れ目の奥に芽生えかけ、さらに悩ましい喘ぎが溢れようとした刹那、今度こそ蓮司が絵美瑠の上から飛び退いた。

「はうう……っ」

慌てて彼女も身を起こし、はだけたスカートを大急ぎで整え正座する。

乱れたブラウスを整えるついでに、まだ指のめり込んだ感触が残る撓わな胸を両手でキユツと押さえ、子犬のような涙目を上目遣いに頬を赤らめ蓮司を見詰めた。

「わ、わざとじゃないからっ！ その、びつくりしちゃって!!」

「分かってるってば!! だ、大丈夫……だから」

顔を真っ赤に染めて土下座しかねない彼に、絵美瑠も慌てて答える。

彼女の許しを得て、少し安堵したように蓮司が溜息を漏らす。

「お、驚いたよ。いつもみたいにきくりが起こしに来たと思ったら、すぐ近くに絵美瑠

の顔があるんだもん」

今度は彼女の顔が真っ赤に上気する番だった。何をするつもりだったのか尋ねられたらどうしよう？ それよりもおっぱいを、あんなに揉まれてしまった。

（へ、変じゃなかったかな？ あたしの胸、こんな不自然におっきいし！ 大きさもそうだけど、形とか触り心地とか！ はうう、どうしよう。あたしのおっぱい、変なおっぱいとか思われてたらっ!! 普通の女の子の胸って、どんな触り心地なんだろう？）

まさか蓮司にどうだったかなんて聞くわけにもいかない。

（それにしても、男の子に触れられるとあんな、電気走ったみたいになるんだ……）

どちらかというところコンプレックスの方が強い撓わな膨らみを、無意識のうちに自分でぶにぶにと揉み弄りながら、恥じらい顔から顰めっ面まで豊かに表情を変えて懊悩する。

「え、絵美瑠……」

その様に一段と顔を赤く染めて、蓮司が恐る恐る呼びかける。

「——ひゃ、ひゃいっ!!」

再び我に返り、慌てて乳房から手を離し畏まった正座となる。

昨日のキスといい、蓮司の前での失態続きを恥じ入りながらしゅんと項垂れる。その巨乳娘へと、寝癖頭の少年はいまさらながらの当惑の面持ちで不思議そうに尋ねた。

「ところで、どうして絵美瑠が俺の部屋にいるの？」

「え？ だって……、昨日、あの後あたしの家まで追いかけてきて、手紙残してくれてい

ったでしょ？ その手紙に書いてあったから……」

ポケットの中に大事にしまった便箋を開いて彼に渡す。

少年らしいちよつと乱暴な力強い文字で、一緒に登校しようと言う一文と、彼女の家からここまでの地図が記されている。

その手紙を見るなり、蓮司が不思議そうな顔でいった。

「これ……きくりの字だ……」

「はあっ!!」

一瞬間聞き間違いかと思った。

便箋いっぱいを使って記されたがっしりとした筆跡の、屈強な益荒男ますらおの雄叫びのごとき豪快極まりない文字。これが、あの小柄で華奢で極度に口数の少ない、儂げな美少女のか細い手によって記されたものとは想像がつかない。

「けれど何できくりがこんな手紙を絵美瑠に……?」

可憐な少女のダイナミックな文字に面食らっていると、蓮司は見慣れているらしくそのことに関してはスルーで、幼なじみの不可解な行動に首を捻る。

「あ、あたしは別に構わなかったけれど。それより、いい加減支度しないと遅刻しちゃうわよ。手紙のことは学園に着いてからきくりちゃんに直接聞けばいいじゃない」

朝の忙しないときだというのにのんびり考え込んでいる蓮司を、呆れながら急かす。

「うわっ、もうこんな時間ッ！ ごめん、今すぐ着替え……る……」

寝間着代わりのTシャツを脱ぎかけて蓮司の動作が止まる。

何をもたもたしているのかと訝しむ絵美瑠に、

「ご、ごめん、服……、脱ぐんでちよつと外で待つててくれる？」

恥ずかしそうに懇願する。

「へ……？ あつ、ご、ごめんつ、いま出るから!!」

思わず直視してしまった色白な素肌。それよりも立ち上がった彼の股間、もっこりとしたジャージの不自然な盛り上がり目に目が釘付けとなった。即座に見ていないふりを装ってドアを閉めると、腰が抜けたように廊下でへなへなとしやがみ込む。

「あれって……蓮司くんの、アレ……よね？ あ、朝勃ち……っていう奴？」

声をひそめて、女子同士の会話で覚えた名称を呟くと、顔の火照りが急激に熱を増す。

「あんなに、なるんだ……。大きく……」

ジャージの前がテントみたくに膨らんでいた。

まさかそれがそのままの大きさではないのだろうけれど、実物を直に目にしたことのない少女には、驚き以外の何ものでもない。胸の鼓動が激しさを増す。

「いつから、あんななつてたの……かな？」

のし掛かられたとき股間に当たっていた硬い感触の正体はアレに違いはない。あんなものが男の子全員についているなんてそれも驚きだ。胸を触られたときにはすでに硬かった。もしかすると、寝ているとき、もう勃起していたのかもしれない。

「やっぱり唯さんとえっちなことする夢とか見て、勃たつちやっただけ……のかな？ ど、どんな風に、なってるんだろ……、おちんちん……。って、あたし、何考えてんのよ！」
エッチなことに興味がないわけではないが、それほど耳年増というわけでもない。

異性の身体の未知な現象に妄想を膨らませながら、絵美瑠は蓮司の部屋の前でへたり込んだまま、高まる股ぐらの疼きに腰を悩ましくくねらせていた。

見ていないふりを装って退室していったが、彼女の目は確かにしつかりと蓮司の勃起した股間を凝視していた。

「ああ……何やってんだ、俺……。いままできくりには見られないようどうにか死守してきたんだけど、まさか絵美瑠に……。っ。どうしよう、エロい奴だっと思われたら……」

まだ昨日知り合ったばかりなのに、それほど緊張せずに話せる女の子。

お互い恋人にとつては得難い女友達だ。
が、自分にとつては得難い女友達だ。

「これでさらわれちゃったら……。いやそれどころかこのこと、きくりと唯ねえにまで話されたら……!!」

告げ口するような娘には見えない絵美瑠だが、ついうっかりということもある。

「それにしても……。すぐく、柔らかかったな……。見た目以上におっきかったし」
彼女らに軽蔑されるのではと心配に思いつつも、まだ生々しく手のひらに残る魅惑の感

触を思い返さずにいられない。

「女の子の胸って、あんな触り心地なんだ。手を繋いだときの感触も柔らかかったけど、もつと……、力入れると崩れそうなの……、でもぎゅって指がめり込むと、しっかり押し返してくるし……。なんだか特別な柔らかさだよな、あれって……」

触り心地を反芻していると、起床時の生理現象で強張った肉竿が収まるどころかますます疼いていきり立つ。その最中、強めのノックが外からドアを打ち付けた。

「ねえ、まだ着替え終わらないの？ まさか二度寝してるんじゃないわよね？」
怪訝そうな絵美瑠の声が再三急かしてくる。

「ね、寝てないってば。着替えもいま終わるから……。——はうっ!!」

大急ぎでシャツのボタンを止め、ズボンを上げる。ファスナーを閉めようとして、危うく挟みそうになり手を止めた。

（ま、まずい！ 絵美瑠のおっぱいとか、エッチなこと考えてたからッ）

朝勃ちがまったく収まってなかった。いやそれどころか一段と充血を増している。

「ほんと急がないとまずいから。蓮司くん、朝ご飯もまだなんだし、ひうっ!!」

どうにかベルトを先に締め、慌てて社会の窓にそり立った勃起竿を押し込もうとするその最中、もう支度が終わったと思った絵美瑠が部屋に入ってくる。

「うわ、ちよっと待って！」

驚いて振り返った瞬間、ズボンに収まりかかっていた怒張が手からこぼれて、トランク

スの布地ごと勢いよく弾け出る。

「なっ!!? それ……それ……!!」

下着が絡んではいるが、ジャージの前をテント状に膨らませていたときよりも、本来の形に近い姿を屹立させる怒張へと、転校生の視線が直撃した。

「い、いつもはもう収まるはずなのにつ、でもあんなことあったし、いや、おっぱいとか考えてないからッ、じゃなくてっ、ええとその、とにかくっ、見ないでっばああっ!」
目をまん丸に見開いて硬直する絵美瑠の前であたふたと勃起をしまおうとするが、彼女の視線が注がれるほどにますます海綿体が硬く太く充血を増してきた。

それでも無理矢理にズボンの中へ押し込もうとした結果、
ぶりゅんっ!!

蓮司の手どころかトランクスさえもかなぐり捨てて、剥き出しの怒張が弾け出る。

「——ッ!!」

悲鳴を上げること目も目を逸らすこともできず、顔を完熟トマトの一角に染めて絵美瑠はただひたすら立ち尽くす。瞬きも目を逸らすことも許されぬ呪いをかけられたように凝視し続ける彼女の眼差しに、赤黒い充血の極太が得意満面で青筋を浮き立たせた。

独立した生き物のようにビクン、ビクンと脈打ち、反り返る角度を急にする。

節くれ立った竿の先で、傘を開きかけた茸のような亀頭からヌトヌトした液が先走って、ただでさえグロテスクな姿をねっとり覆っていた。

(ああ……終わった……。俺の人生ッ)

せつかく仲良くなれたのに、これで間違いなくきらわれた。

いまはあまりのショックに放心しているが、悲鳴を上げられたら階下の母が飛び込んでくる。夜には仕事から帰った父に報告され、顔の形が変わるくらい張り倒されるに違いない。学園でも、唯ときくりはこの件が伝わるだけじゃ収まらないだろう。

絵美瑠から話を聞き出したクラス的女子が噂を広め、やがて教師の耳にまで届き……。学園中からペニス露出くん、略してペロくんと呼ばれ、後ろ指を指されるまでの経緯が一瞬で脳内に展開された。もう前を隠すことも忘れ絶望に立ち尽くしていると、

「そ、そんなままで登校したら、唯さんにきらわれちゃうわよね？」

早口に上擦る声で、栗色髪ツインテールの転校生が尋ねてきた。

「へ……？ あ、ああ、きらわれるっていうか……」

もうそれ以前の問題。そもそも絵美瑠自身、軽蔑したのではないのか？ そう思う蓮司へと、しかし絵美瑠は、存在感たっぷりな巨乳を揺らして恐る恐る近づいてくる。

「じゃあなんとかしなくちゃ……。そ、それって、スッキリすれば、元に戻るのよね？」

「ええっ!？」

女の子からの思いがけない言葉に面食らった。思わずまじまじと見詰めると、絵美瑠は顔を真っ赤にして恥じらい目を伏せる。それでも好奇心が抑えられない様子で、勃起竿に再び視線を戻し、ドキドキと胸を鳴らして荒く息を乱す。しかしこれ以上の事態になった

りしたら、流石に絵美瑠も不快感を抱くに違いない。少女の視線に晒され、また一段と肥大した怒張をもう一度ズボンの中に押し込もうと試みるが、

「だ、だめえっ！」

絵美瑠が飛びつかんばかりの勢いで怒張の前に膝をついて顔を寄せてきた。

「ひえっ!! な、何を? え、絵美瑠ッ」

丁度彼女の顔の直前に、亀頭の先端が迫る。

しかも高々とふんぞり返っているために、裏筋を見せつける角度になっていた。

「れ、蓮司くん……呆れるかもしれないけど……。あ……あたし、えっちな娘、なんだ。でも女の子でも、結構、隠れてエッチな本とか読んだりしてる子もいるんだ、よ……」

そんなことをいわれてもにわかには信じ難い。クラスのエロ男子を見る女子の目は、虫けらか何かを見るようだ。だが……。妙な興奮が、込み上げてますます先走りの汁が量を増す。その様に少しびくりと怯えながらも、やはり彼女は目を逸らさない。

「は、初めて見る……けど、男の子の……って、こんな、なってるんだね。なんだか、思っていたよりも、怖くない……かも」

こんな近くじゃ、生臭い匂いとか絶対に嗅がれているだろう。

真っ赤に上気した顔で寄り目に見詰められ、恥ずかしさのピークだ。

よろけるように後ずさりかけた、瞬間、

「こ……これ、さあ、あ……あたしが、すつきりさせてあげるからっ！」

興奮がピークに達したらしい。唐突に絵美瑠が、裏返ってへろへろになった声で叫んだ。同時に勢いよく、右手で蓮司の怒張を握り締めてきた。

「ほうっ、あああっ!!」

握手のときにも柔らかさと小ささに感動した、ぼにぼにの手のひらが熱く火照った幹肌にしっとり貼り付く。どれほど強く握っていいのか見当がつかず、そつと力を込める指のこそばゆさがかもどかしい甘美をもたらしした。

「な……何で、こんな……?」

恋人でもない男のものなのに、いやじゃないのだろうか? 初めてこんなグロテスクなものを目にして、気持ち悪くないのだろうか? いや、もしかして、彼女には転校する前恋人がいたりして、こういうことを経験したことがあるのか?

そう考えると不意に面白くない感情が湧き上がった。

（つて、絵美瑠は友達、なだけで……別に彼女でもないのに……）

ペニスへの刺激だけでも大変なのに不可解な感情に揺さぶられていると、大胆な転校生は異性の性器に興味津々な様子で息を荒く弾ませていた。

「か、硬いって思ってたけど、表の方はぶにゃって、弾力があるんだ……。さつきから、びくびく動いてる。お……男の子でも、興奮すると濡れるんだね……。ぬるぬるした感じ、女の子と同じかも……」

カウパーを指先で裏筋にぬちゅぬちゅ塗りつけてくる。

「くふうっ!!」

灼熱の電流が亀頭から竿全体を走り抜け、付け根の奥までをも揺るがした。

「ひゃっ! い、痛かった?」

腰から下を脱力に見舞われ、絵美瑠の肩にしがみつくと、脚を震わせる蓮司へ心配そうに尋ねてくる。

「ち……違……ッ、気持ち、よく……て……」

「へえ……ここ、って、気持ちいい、ところなんだ……」

ツインテールの髪を揺らし上目遣いに見上げてくる美貌に、ドキドキしながら首を振ると、感心したような表情で呟いた。

「で、でも、もっと気持ちよくするには、これ、扱くんだよ……ね? ご、ごめんね、こういうの、初めてだから。男の子の、このことって、友達がえっちな話してるの、聞いたことあるだけ、だから……。ええと、こう……かな?」

（は、初めて……だよな? こういうことするの。どう見ても……。そ、そんな娘が、な、何で俺のちんこ……なんか!? 気持ち、いいけど、わけ分からないよっ!）

昨日初めて会ったばかり。愛想がいいが軽い子には到底見えない。なにに大胆な振る舞いをする転校生に戸惑いつつも、局所から膨れあがる快感に抗えなくなる。

「ふう、あ、ああああ……はあうう!!」

いかにも慣れていない動きだけど、自分でするのは比べものにならないほど気持ちが



よかった。少女の手のしつとりした感触で、予想がつかない箇所刺激を与えられると、もう早速、根本に熱い衝動が込み上げてくる。

「気持ち、よさそう……蓮司、くん……。もつと、強くしても、大丈夫？」

上擦った呻きが溢れかえり、陶然とした表情を馬鹿みたいに晒して腰を迫り出すと、絵美瑠が興奮を昂ぶらせ尋ねてくる。噴き出したカウパーが顔にねとねとの水滴を飛び散らせているのに、拭おうともせず爛々と目を輝かせていた。

その様の快活な淫靡さに胸が高鳴り、勃起肉が大きく跳ねる。

歡喜に身をおののかせながら問いかけに頷くと、絵美瑠は暴れる剛直を押さえ付けるようにむんずと握り締めて、たがが外れたようにストロークの勢いを激しくさせた。

「ここ、しゅこすこつ、シコシコシコシコッ！ にゅちゅ、ぐじゅぐじゅッ！！」

「くふうううう——ッ、はああつ、ああッ、絵美瑠ッ、き、気持ち、いいッ！」

うねるような快感が急激に濃度を増して、竿肉の中で膨張しまくる。溢れたカウパーが彼女の手との狭間でぬるぬると男根を潤滑させ、悦感を何倍にも増大させていた。

目眩を覚えるような甘美の強烈さに、階下にまで届きそうな喘ぎを張り上げて蓮司は彼女の細い肩に置いた手を、ツインテール髪が可愛い頭へとしがみつかせる。

「ふあつ、んぷ、あ、あああ、蓮司くんッ。蓮司くん、のがあつ!!」

ぐいと抱き寄せてしまい、勃起の先端が至近距離にあった彼女の顔面に密着した。

裏筋が柔らかな頬に、ナメクジが這ったようなカウパーの液筋を描いて擦れ、あまり高

くない可愛げのある鼻を小気味よく弾く。

恋人でもないのにこんなことをしたら、嫌悪されるのが当たり前だ。

なのに絵美瑠は悲鳴を上げることなく、顔面を汚す亀頭に声を弾ませた。

（な、何で……？ 絵美瑠、俺に、こんなこと、してくれる……？ は、ああ、くふあああつ、ちんこ扱くの、また激しくツ、ああ、気持ちイイツ!! ぷにぷにほっぺに裏筋擦れてツ！ くうう、あああ、もうっ!!）

快感と興奮に頭を渦巻く疑問もぼやけて、されるがままになる。何も考えられない。

シユコシユコシユコ、ヌチュヌチュヌチュ、シコシコシコツ！

疑問を抱きつつも、ますます激しさを増した手扱きの快感に、脳裏が朦朧となった。

はっ、はっ、と息を弾ませ手首をスナップさせる彼女の胸で、巨房が奔放極まりなく暴れ弾んでいる。その光景を目にして、極太の根本から込み上げてきている衝動が激化した。

「はわっ!! れ、蓮司くんの……、ま、また……大きく……。あうっ、こ、こんな……びくびく、するんだ……。あう、これが、男の子の、お……おちん、ちん……」

「く……うう、絵美瑠……う」

女の子の口から男性器の名称を声に出されると、無条件に興奮が沸き立つ。さらに……。

「あ、はあ……こ、これ、だめ……かな……？ でも、……ちゅぱっ」

束の間迷った拳げ句、転校生は激しく手扱きを続ける怒張の先端に、唇を押し当ててきたのだ。

(あ……あの、中……に……)

安産型に骨盤の張り出した豊かな尻を包み込む、紺色の際どい布地に目が引き寄せられる。その内側がどうなっているのかを想像すると、鼓動が早鐘のように鳴り響き、怒張が打ち震えた。肉鏝の先端から先走るヌメリ汁が量を増して滴り落ちる。

「ほら、蓮司のこども、私の中、入りたがって……る、んっ」

「くふああっ！」

その亀頭目掛け、唯がブルマの濡れ股間を擦りつけてきた。

「やめ……っ、あ、そんな……したらッ！ はう、あ、はああああ……!!」

ぬちゅ、くちや、ねちゅぬちゅにゅちよ……。

ぬるぬるにヌメった愛液をふんだんに吸った肌触りのよい布地が、鋭敏な裏筋と擦れ合っつて、狂おしいほどの快感をもたらしてくる。

カウパアの愛液に混じり潤滑が増す中、夢中で腰をくねらせる唯のブラジャーが外れた美巨乳が体操着の中で奔放に跳ね揺れていた。

(こ、これじゃ、昨日と同じ……はううっ！)

唯の体操着姿といい、仰向けの蓮司に跨がってブルマの股間を陰茎に擦りつけてくる様といい、まるで生徒会室の続きを行っているかのようだ。

「ああ、嬉しい、蓮司ったら、私のここで、そんなにおちんちん大きくして」
ただ朦朧としていた昨日と違って、今日の唯ははっきりと目覚めていた。

笑みの裏に憂いを孕んだ眼差しで息を弾ませながら、ブルマの股部分を寄せて女陰を覗かせた。むわんと蜂蜜のように甘く濃厚な発情の牝臭が溢れかえり、煮崩れたような陰唇が花弁がぐच्छよりと綻び開いている。

「挿入^{はい}って、きて……私の、腔内に……」

言葉も忘れて桃色に充血した蜜肉に見入っていると、彼女は自ら腰を落としその濡花の綻び目に亀頭の先をめり込ませた。

「ふあああつ」「はうっ」

触れた途端、彼女の全身が感電したように打ち震え、花弁が窄まって肉鏃へと絡みついていた。その心地よさに蓮司が呻く中、へたり込むように唯の腰が沈んでくる。

狭く窄まった肉穴にたっぷりの淫汁を纏って剛直が埋まり行く。

「挿入^{はい}って……くる、蓮司の、私の、な、か……。く……。ふううっ、はううんッ！」

「唯ねえの腔内……。ッ、挿入^{はい}ってるっ!! で、でも、俺、唯ねえのこと、好きだからッ！」

冴えない平凡な少年にとって高嶺の花の存在になっってしまった、完全無欠の生徒会長として人望を集める少女に、幼い頃伝えられなかった思いを告げて細腰を引き寄せる。

「れ、蓮司ッ! あ、ああああつ、蓮司ィッ!!」

それは恋人としてきくりと告げてあげるべきだといいたげに眉根を寄せながらも、狂おしい思いをぶつけられて唯の全身がわななき震えた。彼の腕に従って腰を下ろす。

ぬぶりと埋まり行く剛直がすぐに何かに突き当たり、

「痛うああああああああつ!!」

聡明な美貌を歪ませる苦痛の悲鳴を伴って、ブツンとはち切れた。

「唯ねえ……ッ、い、いま……の……!!」

そんな馬鹿なと思った。

彼女の口ぶりや積極的な態度から、以前には恋人もいて経験があるのだと思っていた。なのに奥へと進むペニスが膣壁を擦ると、辛そうに顔を顰めて身を硬くする。

「あは、私の、は、初めて……蓮司に、奪ってもらっちゃったあ……。い、痛かった……。けど、嬉し……。い、んふううっ」

彼女が一言発する度に膣が収縮して、擦れ合う怒張が心地よさを増す。その狭穴を押し広げて深々とめり込んだ切っ先が奥を弾き上げると、唯が切ない表情を仰向かせた。

「は、初めて……。なんだ……。俺が、唯ねえの、初めて……」

知っていれば何が何であろうと最初から拒んだだろう。好きな人に捧げるべき処女を自分などが破ってしまつてよかつたのか？ 膣穴へと根本まで埋まりきつた男根の感触に、落ち着かぬ素振りで身を震わせじーっと見詰めて来る。その金髪碧眼の幼なじみへの申し訳ない気持ちと共に、狂おしい喜びが沸き起こつた。

「う、動く、から、唯ねえ。痛かつたらいつて。やめるから……」

下腹で疼く衝動が抑えきれそうにない。すでに熱塊が根本にまで込み上げて来ている。

「大……丈夫、蓮司の、とても熱くて、膣内でトクン、トクン、つてずっと脈打つてる。

き……気持ち、よくて、私も、腰、動いちやうから……」

氣遣う彼に、嬉しそうな微笑を浮かべながら唯が艶めかしく腰をくねらせてきた。
くちゅ、にゅちゅ。

幹竿に貼り付く襜壁が振れて、腔液の淫靡な音色を響かせた。

「ふあああつ、唯ねえッ!! く、うううッ!」

仕草の艶めかしさと亀頭を捏ねられる悦感に、蓮司の腰も鹵止めを失った。仰向けになつた上に跨がらせる彼女の牝穴を下から跳ね上げるように突き込む。

ずぶっ! ぬぼっ、ぬぶずぶにゅぶぬぶぬぶぶッ!!

「んあああつ! すごおつ、蓮司のッ、当たつてるッ、奥ッ、私の奥にいつ!!」

上に乗つかかつての挿入が結合を深くさせた。子宮を奥底まで弾き上げられ、唯のしなやかな肢体がよろけて、蓮司の胸板に手をつき前傾となる。

苦しいのかと思つて心配して見上げると、半開きの唇を赤い舌で舐め回しながら、官能に潤んだ眼差しを漂わせていた。前屈みで釣り鐘型に撓む美巨房を弾ませながら、激しい突き込みを味わい尽くそうと幼なじみが腰をくねらせる。波打つように収縮を繰り返す腔壁は絶え間なく陰茎を締め付けて、切迫的な甘美をもたらしていた。

「ひっ! ひうっ!! ふッ、ああつ!」

悶える度に体操着の布地が肌に擦れるのか、息を詰まらせて上体を断続的に痙攣させる。溢れる量を増した汗がますます吸水性の高い布地をべっとり貼り付かせて、盪惑のプロ

ポーシオンをくつきりと浮かび上がらせる。

「ああっ、唯ねえの綺麗なおっぱい、乳首がますます勃っちゃってるッ！ それに、下から見ると、揺れ方……すごいッ!!」

丸みを帯びて完熟したメロンの様な美房が砲弾型に拉げて左右上下へと自由奔放に弾みまくり、甘く発酵した汗の飛沫を散らす。

普段から身動く度、質感たっぷりな揺れる美巨乳にいけないと思いつつも目を奪われていた。けれども騎乗位に跨がられる寝そべった姿勢から見上げる初めてのアングルの、これまでとは比較にならない迫力に感動の言葉を投げかける。

「ひうつ！ ば、ばか……ッ、変な位置……から、み、見ちゃ、ダメ……だからっ!! それ……、んう……それに、い、ブ、ブラ……蓮司がずらしちゃったからあ、弾みすぎ、ちゃうんだか、ら……ふえええええ、んふああああ……ッ!」

弾みすぎな乳房を両腕で抱きかかえるようにして覆い隠し、照れ隠しの拗ねたような眼差しで可愛らしく見詰めてくる。けれども蓮司が腰の突き上げを強めて、子宮を深めに弾いてやると途端に弱々しい喘ぎを漏らしてへにやへにやとよろけてしまった。

両手を少年の胸板につけて、唯は崩れそうになる上体を辛うじて支えた。おかげで覆い隠していた美巨房が弾み出て前のめりになった体勢で釣り鐘型に撓む。子宮を困らせられた悦楽に小刻みな身震いが止まらなくなり、その乳房を細かく振動させている。

「う……ああ、唯ねえのッ!! 奥ッ、突いたら、また、すぐ、締め付けて、きたッ」

体勢が乱れたせいで危うく抜け出そうになった怒張を引き留めるように、きゅきゅんツ、と膺壁が激しく緊縮した。海綿体の切ない圧迫に少年が喘ぎ喜ぶ最中、

「んふっ、ふ……あつ、は……あう、ああ。——れ、蓮司……い……イッ」

荒く乱れる息を繰り返しどうにか官能の波をやり過ぎすと、金髪ポニーテールの幼なじみは涙でいっぱいになった碧眼を鋭く吊り上げ、羞恥と怒りで真っ赤になった美貌で少年を睨み付けると、軽く拳を握った両手で寝そべる彼の胸板をぼかぼか叩く。

「ご、ごめん。唯ねえが、あんまり可愛いから、つい意地悪したくなって」

その仕草に顔を綻ばせながら告げると、唯の顔が急激に赤みを増した。

「——!! な、何……いつてるの？ わ、私が……可愛……い、って。き、きくりと、間違えてるんじゃない……」

氷の美貌とか高嶺の花であるとか、凜然とした容姿への賛美は常に注がれていた美少女が、幼なじみからの聞き慣れない賞賛に狼狽える。

「間違つてなんかないってば。そういうところだつて、ほら、とても可愛いし。子供の頃からずっと、俺は思っていたからっ」

「わ、私が……？ れ……蓮司……ッ、はうっ!!」

常に厳しく己を律し、目標を高く努力してきた。それでいて他者の前ではその様をおくびにも出さず、超然とした態度で振る舞ってきた。誰も知らない唯の人間味溢れる姿を自分だけが知っている。それを告げられ、伶俐な美貌が喜びに綻ぶ。

目の前に迫る美麗な揺れ房を体操着の上から揉みしだく。

「ひうつ！ あっ、はあああつ！！ 胸ッ、ふえええつ。あ、ああつ、そこ、ふあああつ、感じ……すぎちゃ、うッ。ふあああああつ！！」

布地に散々擦れて過敏になった房肉を大胆に捏ねながら、乳首を押し潰すように刺激してやると恥じらい顔のまま感極まって痙攣に身を震わせる。

「唯ねえの、そこッ、すごいキツく……ッ、ああつ、もう、止まらないからっ！！」

言葉で喜ばせても、乳房を心地よくさせても、ますます熱烈に絡みついてくる。ブルマをとるところに濡らした安産尻を少年の下腹に密着させたままくねらせ、ますます熱い牝蜜を奥から溢れさせる膣へと、蓮司は夢中でストロークを激しくさせた。

ぬぶ、ずぼつ、ずぶずぶずぶ、ぱんっ、ぱんぱんぱんっ、ずぶぶんっ！！

「ふあああ、んあ、ふう〜〜ッ！ 奥ッ、突いてるっ、ふあああ、蓮司の、太い……の、ああああああつ！ 初めて、なのに、こんな、ひうああつ、き、気持ち、イイツ。蓮司の……だから、ふあああああ——ッ！！ こんな、ひいふうううああ！」

技巧も何もない。ただ無我夢中に狭穴を突き上げる。それだけに想いを存分に込めた抽送に、唯は満たされる喜びであられもない喘ぎを迸らせ、幾度も悦楽の痙攣に打ち震えた。

（ああ、こんな、濡れて……、いっぱい、溢れてくる。俺のちんぽ啜え込んで……ッ。俺、唯ねえと、セックスしてるんだ……。ああ、みんなの憧れの、生徒会長と！）

もしいま誰かがこの体育倉庫に用事があつて扉を開けたとしたら……。あつという間に



噂は広まるだろう。こんなことを知ったら、みんなどう思うだろうか？

だがそのときには当然ながら、きくりまでもがこの行いを知ることとなる。

やはりこの睦み合いは誰にも知らせず、二人だけの秘密にしておかなくてはいけない。

背徳の優越感を抱いた直後、そう決意を固めた瞬間に、ガチャリと、扉の向こうで鍵を開ける音色が鳴り響く。

「ふあっ！　そ、そんな……ッ!!」

「や、だ、だめっ！」

不安に思ったことが現実となった。誰かがこの体育倉庫に入ってこようとしている。

このままでは、このスキャンダラスな行いが知られてしまう。隠れなくては。

なのに、まるで見てくれといわんばかりに互いの腰が蠢き続ける。

破滅の予兆に気が昂り、陰茎へ押し寄せる込み上げが止められない。

唯の方も同様に腰のくねりが勢いを速め、膣壁が締め付けっぱなしになった。

（ああうっ、駄目だっつて、ばあっ！　こんな、ときにッ!!）

必死に堪えようとしますが、収まらない。尿道を満たしてゆく灼熱に、幹竿が径を増して膨張した。

「ふうあああっ！　膣内ッで、蓮司のッ!!　ふうあっ、な、何か……来るッ、ああっ、や

ああっ、駄目えッ、いま、だめ……なのにつ、ふあああああああっ、ひっ、いううっ、ふ

あああああ——ッ!!」

——ぶゆうっ！ ぶじやじやあ——ッ!! びじゅっ、べしやしやしや——ッ！
痙攣しっぱなしな膣穴をさらに押し広げられる感覚が、唯を一気に絶頂へと導いた。
熱い潮汁の直撃を受けた怒張が、最後の堰を失う。

「くあああつ、射……精るッ」

ガラリと重い鉄扉が開いたと同時に、

どっぴゅうううっ！ どびゅどびゅどびゅっ、びゆるっ、びゆるびゆるびゆるるッ!!
唯の膣内へたっぷりと白濁の液汁を注ぎ込んだ。

「唯……ねえっ！」

「蓮……司いつ！ ふああああ……はああ……」

頭の中が真っ白に染まる快感の奔流が肉竿の先端から迸る。

逃げ隠れるどころか強烈な悦美に翻弄され、互いに手を握り合い、繋がったままの股ぐらを見つちりと押しつけ合う。汗にまみれた唯の体操着は、ブラから溢れ出た乳房が揺れながら透け見えていた。荒い息を繰り返し、小刻みに身を震わせる。

「……………うそ」

セックスの余韻にしどけない様を晒す蓮司と唯を、開かれた扉の外から呆然とした眼差しで、栗色の髪をツインテールに纏める少女が見詰めていた。

年上幼なじみの乱れっぷりに、物静かな少女もか細い声を振り絞って涙目で抗議してきた。その最中にも、ぶじゅつ、ぶじゅじゅつ、と膣穴からの熱く濃厚な肉欲飛沫を蓮司の腹へと噴き散らす。

「ひゃふつ、ら、らつてえ、へう。蓮司の、おちんちん、膣内^なあ、よしゆぎるからッ。ごめんね、え、きくり、い、でも、これ、蓮司ちんちん、私の、膣内のだからあつ！」

拗ねた眼差しを向けてくる小柄少女に唯は一応詫びつつも、得意満面の淫ら笑みを浮かべながら自慢げに腰をくねらせた。

はためくスカートの下で安産型の尻房がムチムチ撓み、タイトの破れた股間から赤銅色の男根を出入りさせて甘い嬌声を張り上げる。

「くうっ！ 唯ねえッ!!」

ぬぼつ、ズブッ！ じゅぶんつ、ずつぶんつ!! ズプズプずぶ！ ズンズンズムンツ!! 至福の官能に腰が跳ね上がる。

「ふあああん、食べられちゃうっ♪ 蓮司くんにおっぱい、食べられちゃうっ！」

絵美溜の乳房にかぶりつきながら、絡みつく髪を刮げて無我夢中で膣奥を突きまくる。

「ひうっ、はわっ、あ、あああああつ!! だめっ、あ、ああ、はあああつ、もつと、したい……のにつ！ ああああ、で、でも、ふあああああ——ツ!!」

いつまでも極太を啜え込み、膣いっぱい官能を味わい続けていたいのだろう。終わりの気配に抗おうとするが、切迫の衝動が膨れあがると一瞬で虜になる。

狂おしく疼く子宮を乱打され、唯の肢体が痙攣に打ち震えた。

きくりの身体をさらに強く抱き締め、快感をお裾分けするかのように口づけし、女の子の舌を絡み合わせる。

「ひい、ああっ、い……イクッ!! ふああああああ——ッ!」

ぷっしや——っ、ぶじゅじゅっ! びしゅしゅっ、べじやああああ——ッ!!」

勃起肉を根本まで頬張った股間穴から熱く蕩けた飛沫を噴き出し、ガクガクと激しく身を震わせた。その絶頂に脈打ち続ける子宮へと、駄目押しに蓮司の陰茎が怒張を増す。

「くううっ、射精ちやうっ! 唯ねえっ」

びゆるびゆるびゆるっ! どびゅどびゅッ、ぶびゆるびゆるびゆるるる——ッ!!

「ふえあああああんっ!」

灼熱のスペルマを容赦なく注ぎ込まれて、収まりかけた唯の痙攣がまた激しく背筋を波打たせた。生真面目に整った美貌を、えっへらと、快楽の笑みに崩れ乱して白目を剥きながら倒れ込む。

「唯……ねえね……?」

「へあ、あは……あああ、蓮司の、せーしい、奥う、きたあ、びゅーって、ふああ、膣内あ、きもひいい、子宮……精子、かけられ、ちゃった……妊娠しちゃう、かも、うひゅ」

きくりが心配げに顔を覗き込むと、怒張の抜けたヴァギナから大量の白濁をぶぶぶと溢れさせ、小刻みに身を震わせながらうわごとの様に笑顔で眩き続ける。

「くう、あ……ああ、気持ちよすぎて……、唯ねえの、膣内ッ。んはあ……」

そして蓮司の方も、官能のたがが外れてしまっていた。たつぷりと唯の子宮に注ぎ込んだというのに、怒張の勢いが収まるどころかますます勃起を強め、節くれ立った幹肉を絶え間なく脈打たせながら白濁混じりの先走りを絶えず滴らせる。

「あは、すごい、唯さんにいっぱい膣内射精したのに、まだこんなにおつきいまま。これなら、あたしたちいっぺんに相手しても、全然大丈夫だよね？」

その様に、今度は絵美瑠が淫靡な行いの最中とは思えない人懐っこい笑みを浮かべる。一緒に蓮司からの快楽を堪能し尽くそうときくりと唯に誘いの眼差しを向けながら、少年へとしなだれかかってきた。

「あ……っ、蓮……にいいにっ。次は、わ、わたし……。絵美瑠、さん！」

失禁のように内腿に愛液を垂れ流しながら、きくりが訴えるような眼差しをしてくる。

声をかけようとした瞬間、

「ここまで我慢したんだから、楽しみは最後まで取っておいた方がいいよ。いまでさえそんななっちゃんやってるんだから、もつと焦らしたそこに、挿入られちゃったりしたら、頭変になっちゃんくらい気持ちいいんじゃないかなあ？」

絵美瑠がさらにきくりへとお預けを食らわせた。

「ふ、ふえ……ええ……」

彼女の言葉にさらに感度ともどかしさを増した膣穴を蓮司の極太で埋められる想像をし

たのだろう。情けない声を上げて腰が抜けたように小柄な美少女がへたり込んだ。

愛液が増したにしては多すぎる、恐らく失禁したのであろう液染みが足を崩してとんび座りする股ぐらからじよわじよわと広がっていった。

その様を横目に、活発娘が悪戯めいた笑みを浮かべる、

「ねえ、蓮司くん。あのさ、それって、お尻の穴にも……挿入るのよね？」

「へっ!？」

知り合ってから間もないというのに、幼なじみたち同様に昔から親しかつたような気さえしてくるツインテール娘が、突拍子もないことを尋ねてきた。

「前に、エッチなマンガ読んでたら、そういうシーンが出てきてさ。どんな感じなんだろうって気になってただけ……。やってみない？」

「え？ お、お尻……って、でも、絵美溜、さつきが初体験なんだし、そんな……」

彼女のかんりの大胆さに面食らった。尻込みしてると、

「お尻の初めても、蓮司くんに奪って欲しいから……」

元氣いっぱいな口調から一転して、しおらしく頬を染めると照れ笑い気味に求めてくる。

「え、絵美溜……ッ」

淫靡な姿での純真ささえも感じさせる言葉に、少年の胸が高鳴った。

ほんの少し前に処女を失った元氣娘は際どいホットパンツのお尻を蓮司に向けると、もじもじくねらせながら、食い込みが激しい窮屈なジーンズ地を脱ぎ下ろしてゆく。

タイトな穿き心地に引っぱられて青白縞柄のショーツが半分ずり落ちる。思いきりよくそれも無造作に引き下ろすと、ほどよく引き縮まって張りのある尻房がぶるると揺れ弾んで姿を現した、

「え、ええと……、どうぞ」

胸の蕩ける柔らかか房とは、ある意味対照的な弾力のお尻を蓮司へ突き出して前屈みになる。口調はあくまでもあっけらかんとしているのだが、振り返りかけてすぐに前を向いてしまった頬が真っ赤に染まっていた気がした。

「わ、分かったよ……。でも、本当に、いいの……？」

彼女に圧倒されるように決意する。

健康的に引き締まった桃のような張りのある尻が、忙しない絵美瑠の身振りに併せてぼわぼわと弾む。腰の括れとの対比でポリウムを増して見えるその双房の狭間、鳶色の皺口が女陰から溢れてきたヌメリ汁に濡れて弛んでいた。

ひゆくひゆくと蠢き続け開いたり窄んだりを繰り返すその、どう見ても極太い逸物が収まるようには見えない狭穴口を見詰めながらも一度問いかける。

「うん♪」

肛門を少年へと向けて前傾姿勢に尻を突き上げながら、あっけらかんと頷いた。

「じゃあ、挿入る……から」

それでも尻を両手で支えると、ピクンと彼女の背中が震えた。めり込む指先を、熱帯び

た房肉が押し返してくる。その双房の狭間へと蓮司は陰茎を埋め込ませ、恥じらいにひくつく肉門へと切っ先を押し当てた。

「んああっ！」

覚悟はしていたはずだが、絵美瑠が怯えたような声を上げて身を強張らせる。しかし今度は余計に氣遣うことはせず、少年は未知への興奮にいきり勃った竿肉を押し込んでゆく。

「く……ひい……あ、ああ……、お、尻イ……ッ」

竿肌を挟んでいる弾力の房がぶわぶわで心地よい。先細った亀頭の先がめり込むと、窄まってしまった菊皺が押し広げられた。

ぬっ、ず……ぶっ、ずぶぶ。

「くうん、おおおあつ、挿入って、来……、ふえあああつ!!」

初めての箇所だ。しかもヴァギナと違って本来排泄するための器官であり、外から異物を入れるようにはできていない。有無をいわせぬ押し込みに亀頭が埋まり込むと、それ以上の侵入を拒むように収縮を強めた。擦れ合う感触がヴァギナよりもキツく、中はヌルヌルにぬめっているというのになかなか進まない。

「絵美瑠、もう少し、リラックスしてッ」

「う、うん。分かって、いるんだけど、なんか、緊張が……」

先っぼだけを唾え込ませたまま、焦れば焦るほど悪循環に陥る。強情に窄まった直腸をどうにか和らげようとすると元氣娘だったが、上手いかず声が半べそだ。

(強引に突っ込んだら、やばいよな……)

膣と違って柔軟に欠ける肉筒は無理をすれば怪我させてしまいそうだ。どうしたものと途方に暮れていると、

「ああ、絵美瑠さんの胸……。本当に柔らかくて、触り心地満点」

「お……大きくて、羨ましい……」

前屈みで釣り鐘型に吊り下がった巨乳房へと、唯ときくりの二人が触れてきた。

「ふあつ、あ、あああつ！ だ……だめつ、だめえツ!!」

驚嘆と羨望の入り混じった揉み弄りに、絵美瑠が早速悶え乱れる。

アナルに挿入された緊張で全身の感度が急激に跳ね上がっていた。

「うううあはうおおつ、かふうつ!! んあううううはああツ！ うそお、お乳い、こん：

…な、あああああツ!! ふひああはあうつ！ お尻い焼けるううつ、キツうい、はあああ

ああ——ツ!! こんなつ、こんなツツ、はああああ~~~~つ!!」

身をくねらせるとますます刺激が跳ね上がって、慌てて息を詰まらせながら全身を強張らせる。アナルへの挿入が全ての神経を過敏にさせる想像すらできなかつた事態に、泣き出しそうな表情で顔を強張らせながら背中を断続的に震わせて、息を荒く弾ませる。

へなへなと四つん這いに崩れ落ちるが乳房を捕獲した二人の手は離れず、乳首を指先で弾きながら撓わな熟肉を拉扯続ける。

「はひい、乳首……そんなされたら、へああ、は、ああ」

あん……はあああああッ!! お尻い、蓮司の、動つ、んああああッ!!」

収縮しっぱなしの腸壁に握り締められたままで、抜き差しを繰り返す。直接海綿体に沁み渡つて熱く痺れるような快感をもたらす窮屈な刺激に、抑えきれず腰の動きが激しさを増すと、唸るように苦しげな声ながら、絵美瑠の喘ぎに喜びが溢れた。

(絵美瑠、感じてるっ!! お尻、気持ちいいんだっ。前に挿入られるのと同じくらいッ。もしかすると、それ以上につ!!) ふわああ、蠢いてるッ。絵美瑠のお尻の中つ、俺のに絡みついてきてるっ!!)

お預けを食らつた膣が羨ましがるように、愛液をこぶこぶと溢れさせて床に染みを広げていた。その前穴に負けじと滲み出る腸汁が、怒張を突き込む度に濃厚な飛沫を散らす。相変わらず締め付けっぱなしな直腸内は窮屈だし、カリ首が襷を刮げる硬い感触は変わらないのだが、甘美を味わつた穴肉が挿入を喜ぶようになったのか挿入たばかりのときに感じた拒絶的な抵抗感を感じない。

ずんっ、ずむっ、ずぶぶっ、ずぼっ、ずぶっ、ずぼぼ、ずばんっ、ずばんんっ!

熱烈に絡みつきながら埋まりくるのを手伝うように腸襞が蠢き波打つ後ろ穴へと、蓮司の突き込みが一撃ごとに勢いを増して奥底を弾き上げる。それを迎え撃つように尻を高々と突き上げて、8の字を描くようにくねらせながら絵美瑠が嬌声を張り上げた。

「ふああッ! 叩いて、るうっ!! 蓮司くんの、おちんちんッ! ひうっ、響いちゃうッ、お腹、あああああ、たくさん響いちゃうっ。だ、だめえっ!!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方購入して下さい。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!